金沢時代とケルンでの日々
―ある家族史点描―

八　田　生　雄*

はじめに

歴史の出発点は人の記憶である。人は自分の眼に映った現実の記憶を持つものである。なかでも人についての人の記憶には特別の意味がある。というのも、人は人によって感化されるがゆえに、人と人との関わりは人にとっての重大関心事である筈だからである。記録によって記憶を補い助けながら、人についての記憶を維持し続けようとするのが人である。

人はまた安心していられる場所を必要とし、その安心を支えているものはこれまた人と人との関わり、つまり人間関係である。人は家族の中で生長を始め、人間関係の基本を家族生活の中で身につけていく。

生活が貧しく、日常的に生きることさえ大変だった時代には、家族による援助・支えはいちいち説明するまでもない自明のことだった。家族が協力しないことには生きてゆけなかったのである。家族の中で人は生きるための技を習得し、またその先の人生を生き抜くために家族の援助は不可欠であった。

民衆の日常生活にとっては家族と労働こそが二大関心事であった。家族史は民衆史の出発点をなす筈であるが、いうまでもなく家族の実態は千差万別である。それゆえ、個々の家族の経験の報告は、歴史というものを考える材料の提供として、少なからぬ意義を持つといえるのではなかろうか。本稿は、私の人生で一番ワクワクもし、ヒヤヒヤもした時期について、家族史を念頭において、書き残された記録を読み返し、追体験してみたいと思って書いたものである。

第一章　金沢での新婚時代

1968年9月1日付で金沢大学の助手に採用された私は、同年12月22日に結婚した。夫27歳、妻25歳の若夫婦の誕生だった。二人のなれ初めは、二つの大学の学生同士がつくっていた読書会で、それは大学が所在する都市で交互に毎月1回開かれた。時にはハイキングやコンパがあわせ行われることもあり、会員のエッセイを集めた文集が年1回作成されもした。市電と郊外電車を乗り継いで2時間位離れた所で二人はそれぞれ下宿生活を送っていた。電話はなく通信手段はもっぱら郵便という状況はかなりの期間続くことになった。というのも、彼女は卒業し就職しても同じ下宿に住み続けたから。

結婚した翌月の月末に新聞代集金の女性が「この家は大きいですね、寒いでしょう」と言った。実はこの女性は前月にも全く同じことを言ったのであった。金沢での新婚時代に住んだ家は、古くはなっていたが堅牢な日本家屋で、もともと旧制四高の校長官舎であったものを新制金沢大学が引き継いで、教官2世帯が上下に別れて住んでいた。その家で私は床の間付きの八畳間を書斎にしていた。首都圏では地価が高く、その分住宅事情が悪くて、八畳間や十畳間にはめったに座れないことを埼玉に移住してきて発見した。

妻は結婚以来、『わが家の記録』という表題の日記と婦人之友社発行の『羽仁もと子案　家計

* はった・いくお
埼玉大学教養学部教授、西洋史学

簿』をつけてきた。日記の方は1986年に現在の住居に「人生最後の引っ越し」を済ませた後、いつしか書くことを止めてしまったが、家計簿の方は今日まで続いている。日記にはその日の出来事や感想の他に、読み終えた本の書名、受信・発信の郵便物の記録および食事（とくに夕食）の献立が書かれている（ただし献立の記載があるのは出産の前々日まで）。そのころ、私どもの家にはまだ電話がなかった。公衆電話から岡山県の妻の実家に市外通話すると、１月３日には７分間で465円かかった。それが４月24日に岡山までかけた時には７分間で651円だった。通話料は時期や時間帯により変動があった。ちなみに朝日新聞の一ヶ月の購読料が500円の時代である。当時はコミュニケーションの手段として郵便の占める役割は大きかったと思う。そこで1969年1年間のわが家の郵便物の数を表にまとめてみた。表の数字は、ハガキと手紙の区別をせず、夫と妻の分を合わせたものである。この他に１月に受け取った1969年の年賀状が二人あわせて108枚、12月に出した1970年の年賀状が97枚ある。

表　1969年のわが家の郵便物の数

	１月		２月		３月		４月		５月		６月	
	来	発	来	発	来	発	来	発	来	発	来	発
A	3	3	3	4	1	2	1	1	2	2	2	2
B	6	3	2	4	3	2	4	4	3	2	3	2
C	5	5	10	5	2	2	3	4	4	5	3	3
D	4	6	13	4	8	4	6	6	9	6	8	5
E	2	1	2	1	2	4	5	0	0	0	2	0

A：夫の母、B：妻の母、C：その他の親族、
D：先生・友人・知人、E：事務連絡等

	７月		８月		９月		10月		11月		12月	
	来	発	来	発	来	発	来	発	来	発	来	発
A	1	1	1	3	3	2	1	0	1	1	1	0
B	2	2	6	3	3	1	2	2	3	3	2	0
C	3	2	2	4	5	1	5	7	2	1	3	0
D	11	8	12	10	4	5	13	13	4	2	4	0
E	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0

注：日記は９月16日から10月16日まで夫が記述しており、そのうち９月16日から27日までの間には郵便物の記載はない。

夫の母はマッカーサーという渾名をもつ女傑で、澱みなくスラスラとハガキや手紙を書く筆まめな人であった。親元を離れた学生時代以来、しばしば手紙を寄越してくれ、私が結婚した頃はまだ至って元気で、結局その後96歳まで長生きした。夫の実家（福井県）および妻の実家（岡山県）から離れた土地で新しい世帯をつくって生活を始めた二人に対して、双方の母親が強い関心と温かい配慮を示し、物心両面にわたる援助を行ってくれた。

結婚後、夫の母が来泊した日は次の通りである。

1968年12月30日１泊、1969年５月28日から７泊（この時は夫が旅行して留守をしたため、両親がわが家に滞在した。父は28日より２泊した。）、７月23日１泊、９月19日１泊，10月15日２泊、11月30日２泊。

妻の両親が来泊したのは下記の２件。

1968年12月23日１泊、1969年３月29日２泊。妻が出産した後、妻の母が９月18日から10月16日までわが家に滞在して面倒を見てくれた。

妻は結婚して直ぐに妊娠した。初めての妊娠による体調の変化、出産、育児が新婚時代の日記の重要なテーマとなっている。つわりの記述は１月12日から始まる。「胸がむかつく」、「気分が悪くなる」、「吐き気」、「吐く」等のつわりの記述と思われるものが見られる日付は下記の通りである。

１月：12，16－19，21－28，31日。

２月：1－4，7－8，10，17，19，26日。

３月：1，3，5，14，17－21，28日。

４月：5，10－11日。

これ以降は安定期に入ったと思われるが、お腹が大きくなると今度は「しんどい」、「身体だるし」、「グロッキー気味」等の記述が下記の日付に見られる。

４月 28 日、５月 31 日、６月 27，30 日。

７月：8，10，12 － 13，19 － 20，23 日。

８月：1，6，8，22，26 － 27 日。

９月：3，6，15 日。

貧血気味で低血圧という妻の体質が妊娠中の長期に及ぶ体調不良を招いたのではないかと思う。

妻がお世話になったのは寺町の鈴木産婦人科病院であった。２月５日に初めて診察を受けに行き、診察の結果、妊娠３ヶ月の初め、出産予定日は９月 13 日と言われた。２月 13 日に母子手帳の交付を受けるための手続き書類を貰い、２月 17 日の第２回診察の日に、保健所宛の妊娠届けを産婦人科病院の受付に提出した。４月８日に第３回の診察を受けに産婦人科病院へ行き、４月 10 日には母親教室受講のため産婦人科病院へ行っている。それ以後診察を受けるために産婦人科病院へ行った日付は次の通りである。

４月 30 日、５月 12 日、６月５日、６月 30 日、７月 15 日、７月 29 日、８月６日、８月 12 日、８月 26 日、９月３日、９月 13 日。

９月 16 日の診察後、昼食を済ませて、午後入院した。９月 17 日正午ごろ陣痛をはやめる薬と注射を重ねてから長い苦しい半日が始まり、午後 11 時 45 分に女児を出産した。妻と長女が退院したのは９月 24 日だった。

出産後は育児の苦労や長女の成長の姿が日記のテーマとなる。「だっこし過ぎて疲労する、便が出ない」（10 月 19 日）、「夜中の２時から３時半まで寝てくれなくてだっこしている」（10 月 23 日）。「目が見え出した徴候あらわる」（10 月 13 日）、「初めてお風呂に入れる」（10 月 20 日）、「一人で遊べる時間がだんだん長くなってきた」（10 月 30 日）、「連続して声を立てて笑うようになる」（12 月 14 日）、「かなり長い間おすわりが出来る」（12 月 26 日）。

さて、私は 1969 年４月より非常勤講師として北陸学院女子短大で歴史学を教えることになった。この年わが家に来訪した学生数を見ると、金沢大学の西洋史専攻の学生は、１月 19 日に９人、２月 25 日に１人、５月 25 日に２人であった。他方、女子短大生は６月 15 日に５人、７月 19 日に３人、７月 31 日に４人、８月 17 日に２人、10 月２日に３人、10 月４日に２人と続き、金沢大学の学生の関心が大学紛争に移っていったのに対し、女子短大生にとって新婚家庭が興味の対象であり続けた様子が見て取れる。

新婚時代に妻が書いた日記を読み返してみて気づくことは、フェミニズム的発想が一切見られないことである。夫を主人と呼んでいるし、夫の母や親族との交際に違和感を示すこともない。むしろ結婚できた喜びが行間から伝わってくる内容になっている。

第二章　ケルンでのホームステイ

1970 年 10 月に私が埼玉大学教養部に着任してから、わが家では娘がさらに２人生まれていた。結婚 10 年目の 1978 年夏休み、三女も満４歳になった年に、子供たちを妻の実家に預けて私ども夫婦はヨーロッパ旅行に出発した。

夫は西ドイツのケルンでドイツ語の、妻はロンドンで英語の研修を受けることになった。ユーロセンターは、その国の言葉が話されている土地の市民家庭にホームステイして外国語を学ぶことをコンセプトにしている語学研修機関であり、本部はスイスにある。

私がケルンに到着したのは７月 29 日（土）で、暑い日だった。市電の中で日本の扇子を使っていると、向かい側に座っていた男性が興味を示して、話かけてきたことを覚えている。

私が滞在した家庭では、イギリス人既婚青年、フランス人青年、それにスイス人女子学生とあわせて４人が４週間、ともに暮らした。授業は午前中で終わり、午後は市内見物や近辺への小

旅行、週末は国内旅行をした。鉄道を利用しての旅行で、同じコンパートメントに乗り合わせた人とつとめて会話を試みた。その結果、車中でどういう人だったら話かけてもよいかが経験から分かってきた。子供はまず駄目である。トラブルは避けたいから、こわそうな人は勿論ダメ。年取りすぎた人は、よく聞き取れない。ゆっくりとはっきりと喋ってくれ、明晰な人が好ましい。結果的にこの年の旅行では何人もの女性教師と会話することになった。

8月12日（土）にハイデルベルクに行った時のこと。マックス・ウェーバーの住んでいた家を探したり、フリードリヒ・エーベルトの生家を見たりしたあと、いうまでもなくベルクバーンに乗って古城観光をした。

マルクトプラッツのレストランで夕食をとる。入ってみると調理をしている2人はラテン系だと思われた。勘定の時、50マルク札を出したが、卓子の上に並べられた釣り銭が10マルク足りないと思い（私の勘違いだった）、ヘア　オーバー！ヘア　オーバー！と呼ぶと客がみな、一瞬緊張したようにみえた。ヘア　オーバーは怒ったようにドイツ式にもう一度釣り銭を数えながら並べてプィッと向こうへ行く。私ははした金の70ペニッヒを机上に残して、ダンケ　シェーン！といって店を出た。ヘアオーバーがヴィーダーゼーエン！と言った。私も疲れて頭が働かなくなっていた。

8月18日（金）の授業が終わってから、ブレーメン行きの列車に乗った。その夜、ブレーメンのホテルで日記に次ぎのように書いていた。

「この世の幸せとは、それが失われてはじめて実感されるものである。健康の有難味は健康でなくなったとき実感される。家族生活の幸せは家族から離れたときに実感される。お金の値打ちは、お金がなくなったときに思い知らされる。青年期の美しさは青年でなくなったときに愛おしく思われる。日本の良さは日本を離れたときに知らされる。

今日、ケルンからブレーメンへの車中で出会った人たちは、それぞれドイツ語でいうネットな人たちだった。人好きのする人、感じのよい人、信用できる人。自分自身がネットにふるまってはじめて、人々にネットな態度を期待できる。ネットな人々がつくり出す雰囲気、それは他の何物にも代え難い人生の美しさである。」

ドイツを旅行していて興味を惹かれたものにシュレーバーガルテンがあった。これは各都市の郊外で随所に見かけられた。持ち主の家ごとに区切られた100坪位の菜園がいくつか密集している。列車の窓から眺めていると、自分のシュレーバーガルテンで水着姿で日光浴をしたり、テーブル・椅子を出してお茶を飲んでいたりする。日本の一坪農園よりはずっと広くて、設備が恒久的で、楽しみ方が違うように思う。最初見たときは貧民の住居と誤解したが、市中の集合住宅に住む人たちが、余暇をシュレーバーガルテンで過ごしているのである。シュレーバーガルテン以外でも林の中とか池や川のほとりで憩うドイツ人の姿を多く見かけた。

8月22日（火）の午後、小菜園コロニーを見に行った。いわゆるシュレーバーガルテンである。何人かの人と話をしたが、ケルン市が希望者に年500マルクで貸し出しているのだと言う。りんごや梨の木もあり、野菜が作られ、家族ぐるみで楽しんでいる。コロニーの中には小動物園や肥料等の販売所もあった。

北ドイツを旅行した時は窓外にどこまでも続く大平原を見て、景色は単調さをまぬがれないけれども、ドイツには空間的余裕があると思った。ケルンに住んでみて緑の豊かさが羨ましい。住居は画一的との印象を受けるが、一戸当たりの面積が広い。ユーロセンターの教室の雰囲気も全体的にリラックスして楽しいのだが、教え

るべきことは教えている。

教室の中の級友を観察した。

イタリア人…陽気でくだけている。フランス人…プライド高し。スイス人…フランス語地域とイタリア語地域でははっきりと様子が違う。ベルギー人…育ちがよくて理知的(アン)。イギリス人…紳士かつスポーツマン(マイク)。ギリシャ人…神秘的な目つき。フィンランド人…男は熊の如く、女は小さくひっこんでいる。ポーランド人…農業を営む中年男が一人。スペイン人…人望あり、かつ歌が上手（フェルナンド)。メキシコ人…小柄で陽気そう。

ユーロセンターでは松山商科大の比嘉清松教授と知り合いになった。ユーロセンター・ケルン校の近くにブルシェンシャフト・ゲルマニアの白い建物があり、8月24日（木）の午後、比嘉教授と2人でそこへ訪ねて行った。たまたま在館中の3人が建物の中を案内した上で、ビールとジュースでもてなしてくれた。ブルシェンシャフトの歴史、とくに第二帝政期に果たした役割、マックス・ウェーバーのブルシェンシャフトとイギリスのクラブ・アメリカのゼクテとの比較論、ブルシェンシャフト・メンバーの義務等についての説明には興味を掻き立てられた。

ケルン大学教授ハンスユルゲン・リンケ氏の私宅を初めて訪問したのは、8月24日の夕方5時だった。リンケ夫人珠子さんと2人のお嬢さん（12歳と10歳）が在宅しておられた。午後8時に教授が帰宅され、夕食が始まり、夜9時40分すぎに辞した。リンケ教授は、静かで人間味があり気品のある方との印象を受けた。

珠子さんは教養部のドイツ語の先生だった。私の研究室にある本を何冊かお貸ししたことから交友が始まった。『埼玉大学紀要』（外国語学文学篇）に発表された2篇の論文を読むと、リンケ教授の研究が彼女の研究の柱になっていることが察せられた。ハルトマン・フォン・アウエの『イーヴァイン』の複数の写本を比較して、本文の確定を目指す作業である。それは『イーヴァイン』の翻訳をする上で不可欠な作業でもあった。

ユーロセンターで勉強し、ドイツ人の家庭にホームステイしたことは貴重な経験となった。ホテルを渡り歩いてあちこち旅行しても、それではドイツの表面しか分からないであろう。今回の旅行の成果は、自分一人でも何とかドイツで生活できるのだという自信を得たことではなかろうか。やり方を一通り飲み込めば、あとは容易である。

第三章　ケルンでの家族生活

—子供たちの教育を中心に—

1985年4月、その頃私どもは大宮市盆栽町にある公務員宿舎に住んでいた。桜の老木からなる桜通りの脇に3棟の宿舎があり、満開の咲き誇った桜花は、友人・知人に「見に来て！」と呼びかけたい程、見事なものだった。この春長女は浦和第一女子高に入学し、入学式のあと妻と長女は県庁へパスポートの申請に行った。申請から1週間後、5人全員がパスポートを受領した。私ども夫婦が1978年に初めて渡欧した時、旅券の申請のためには例えば自分の貯金の残高証明が求められたものであるが、そういうことはその後必要とされなくなった。

妻と娘3人が北極回りの大韓航空機でパリに着いたのは5月30日午前8時であった。パリ在住の画家森ミツ子氏に予約を依頼していたホテルに3泊した。すぐにシャンゼリゼに出て、凱旋門、ルーヴルを見、シテ島へ行く途中、移民の子供たちの群に囲まれ、一寸の隙に財布を盗まれた。中学2年の次女がとくに緊張してそれからはしっかりガードするようになった。夕方、森さんがホテルに来られ、財布盗難の一件はパリ名物の一つで、パリっ子は現金を持ち歩

かない等を話して下さり、ほっとした。

私が南回りのルフトハンザ機でドイツに着いたのは6月2日。国内便を乗り継いでケルン・ボン空港には午前10時20分に到着した。同日早朝、妻子は列車でパリからケルンに向かい、昼過ぎにケルン中央駅で無事再会した。

1階に食堂（タベルナ）、2階に3寝室というギリシャ人経営のペンションに3泊したあと、いよいよ賃貸マンションでのドイツ生活がスタートした。Mauenheimerstr. 48の住居が離独する迄続いたわが家の住所となった。

日本で高一、中二、小六だった娘3人は自宅から徒歩5分の所にあるギムナジウム・ケルン-ニッペスに8月5日（月）の新学期から通学できる手筈をつけた。

ケルンに10ヵ月間滞在することになったとき、一番気がかりだったことは子供たちの教育をどうしたらよいかということだった。デュッセルドルフには日本人学校があったが、ケルンにはなかった。

まず、渡独する前に、東京・虎の門にある海外子女教育振興財団に行き、義務教育課程にある次女と三女の通信教育を申し込み、代金を払った（5月18日）。ケルンに着いて住居が定まり、Gastschülerinとして通学する学校も決まったとき、一安心したものである。6月14日（金）には子供たちのAnmeldungscheinをギムナジウムに提出し、その時、8月5日午前10時に筆記具をもって登校するように指示された。

6月24日（月）からは月・水・金の午前中2時間、妻子のドイツ語家庭教師として黒沢冨美子先生に来て貰うことになった。黒沢先生はケルン在住で美術史の研究をしておられる。ご主人はオーストリア人とのこと。この勉強は8月2日まで6週間続いた。

ギムナジウムの授業が始まって1週間経過した頃から次女の愁訴が日記に表れる。8月11日（日）には「日本に帰りたい」を連発し、翌日には「日本人学校へ行くと言って泣いた。」8月30日（金）には次のように記されている。「次女が学校でメソメソ泣き、級友に連れられて長女の教室に来た。友達がWarum？と聞くが、『日本に帰りたい』と一度言っただけで、それ以外は何も言わなかった。まだなじめないでいる様子。しかし三女は一人楽しく友達と付き合っているようである。」

このように、高校受験を前にして一番重要な時期である中学2年の段階で言葉の通じない学校に放り込まれて、次女には相当にこたえたように思われる。

9月以降になると学校生活に対する次女の不満は日記に登場しなくなる。9月30日付で従兄に宛てた手紙の中で私は次のように書いていた。

「子供3人は近くにあるギムナジウムに通学していますが、ドイツ語、英語、それに上2人にはフランス語もあって楽ではないようです。しかし数学、体育、図工など言葉の障害の少ない科目ではドイツ人の子弟に伍していくことができます。」

参考までに次女のクラスの時間割を示せば下記の通りである。

	月	火	水	木	金	土
Ⅰ			物理		独	独
Ⅱ	独	英	地理	体育	英	独
Ⅲ		仏	仏	体育		政治
Ⅳ	仏	独	数学	数学	仏	政治
Ⅴ	数学	体育	英	英	政治	
Ⅵ		地理	図工		音楽	

Ⅰ：8：00－8：45，Ⅱ：8：50－9：35，
Ⅲ：9：50－10：35，Ⅳ：10：40－11：25，
Ⅴ：11：40－12：25，Ⅵ：12：30－1：15

次女はスポーツが得意だったので、10月16日（水）に、ギムナジウムの教師が指導する地域のバレーボールクラブの練習に参加すること

になった。練習は毎週水曜日の午後４時半から２時間行われ、翌週からは地下鉄に乗って一人で行った。

10 月 1 日（火）夜 7 時半から 10 時近くまでギムナジウムで三女のクラスの父母会が開かれ、私が出席した。父兄約 30 人が出席し、そのうち 12，3 人が父親だった。数学の先生と担任で英語と図工を教える Miss Reeve が出席された。話の内容はほとんど分からなかったが、授業やクラスのあり方について父兄から次々と議論がもちかけられた感じであった。

10 月 31 日（木）午後４時半頃、長女がプロテスタントの教会が主催する合宿に出発した。日曜日の夕方まで３泊してくる。これは級友の Anke に誘われたもので、全部で 25 人が参加する。11 月３日（日）午後４時頃、長女が帰宅した。「ドイツ人の友達に囲まれて結構楽しんだ様子である。」

12 月７日（土）午後３時すぎにギムナジウムの校長 Frau　Dr.　Bellebaum がわが家を来訪され、午後５時すぎまで歓談した。日本茶、ちらし寿司、紅茶、ケーキを出した。「お箸を使うのは初めてと言われ、ナイフとフォーク風に左右一本ずつ持ってごはんをつまもうとされ面白い。」写真を数枚写した。「気が張っていたけれど、思わぬ楽しいひとときで嬉しかった。」

ギムナジウム・ケルン - ニッペス創立 75 周年記念文集 *75 Jahre Gymnasium Köln - Nippes 1903-1978* を校長先生より贈られた。その中で、Das Lehrerkollegium 1978 として載っている先生方の肩書の多様さに驚いた。

Oberstudiendirektor
Studiendirektor
Oberstudienrat
Studienrat, Studienrätin
Studienrat z.A.
Studienreferendar, Studienreferendarin
Studiendirektor i.R.
Realschullehrerin
Diplomsportlehrer, Diplomsportlehrerin
Diplomchemiker
Diplompsychologe
Lehramtskandidat
Cand.rer.nat.
Cand.gym.
Lehrassistent

12 月 19 日（木）夕方５時半より幼稚園を借りて三女のクラスのクリスマス会があり、３人で出席した。妻はちらし寿司を持参した。それぞれの家庭がコーヒー、ケーキ、サラダ等を持ち寄る。三女が「きよしこの夜」の日本語歌詞を間違って皆に教え、そのままアトラクションで全員が歌ったのにはおかしくて、お腹が痛くなってしまった。

12 月 25 日（日）午後５時半―９時、三女のクラスの友人 Judith の家を４人で訪問し、夕食をご馳走になった。長女は夕方、発熱のため家で寝ていた。

1986 年１月４日（土）午後、三女の級友 Judith とその妹が来訪、夕方まで次女も含めてトランプなどをして一緒に遊んだ。長女は Anke から電話があり、アイススケートに行った。夕方、Anke とともに帰宅、Anke は４日５日とわが家に２泊した。Anke は夜、厳寒にもかかわらず、窓を開けて寝る。眠る時には新鮮な空気が必要だからとのこと。

１月 26 日（日）三女の誕生会を催した。女の子７人を招待し、チャーハン、コロッケ、豚肉とキウリの串刺し、ポテトサラダ、サンドイッチのメニュー。それにケーキと駄菓子。コロッケが好評であった。正午より４時までの予定が５時過ぎになった。

２月５日（水）長女の級友 Anke が成績不振のため、カーニバルの後、Realschule に転校する

ことになったという。

3月12日（水）次女が放課後、級友のStefany, Petraとcaféに行き、その前後に2人がわが家に立ち寄った。

3月13日（木）夜7時半から2時間、ギムナジウムで三女のクラスの父母会があり、妻と2人で出かけた。ドイツ人は問題があると会議を開き徹底的に議論する。ドイツのエリートとは、その議論で全体に対して影響力をもてる人のことである。教師はPolitik担当のHerr Backwinkelと校長のFrau Dr. Bellebaumが出席した。校長先生も即席で雄弁を振るわれた。この校長先生は生徒や父兄をよく把握していると思う。あとで校長先生に挨拶してこれまでいろいろと世話になったお礼を述べた。

3月14日（金）子供3人のギムナジウムでの授業が今日で終わった。校長先生からZeugnis（在籍、成績証明書）を貰ってきた。次女と三女はクラスでお別れ会をしてもらった。三女の級友数人がわが家まで送ってきてくれて、途中から皆泣き出したという。次女は名前入りのMont Blancの万年筆、先生とクラス全員の顔写真の入った額などを貰った。

担任の3人の先生には妻が出かけて挨拶したが、三女の担任のFrau Reeveには先生の都合で会えなかった。通称Miss Reeveは図工の時間に三女の顔を描いてくれ、また絵本を記念にくれたりした。

ギムナジウムの8ヵ月は良い先生、級友、父兄に恵まれて本当によかったと思う。子供たちも全員皆勤で、言葉の通じない生活に耐えた。長女はドイツ語、フランス語が分かりかけて、自分で勉強する態勢ができてきた。

ケルンでの生活が大過なくスムーズに進行したのはリンケ珠子さんのご支援によるところが大きかった。この間リンケ教授宅を4回訪問したことになるが、そのうち6月6日と2月22日には家族5人を夕食に招待して下さった。2月の時には黒沢先生夫妻も一緒だった。

珠子さんがわが家に見えたこともあるし、電話や郵便によっていろいろとアドバイスを得たものである。また、私が離独する日にはケルン・ボン空港まで見送りに来て下さった。

おわりに

私どもは、下宿生活の頃はもとより、結婚してからも金沢時代には、電話もテレビも自宅にはない生活をしていた。そういう生活は庶民の家庭では別に珍しくはなかった。しかしその分、日常的な人との交際は活発だったといえるように思う。妻の書いた日記を読むと、いろいろな面で隣人をはじめ、人との交際に多くの時間を割いていることが分かる。今日では長電話で済ませていることを直接人と会って話している。

学生の来訪が比較的多いのもこの時代の特色である。彼らにとっても、個人的に楽しみを追求する手段に乏しかったためであろう。官舎の隣に女子寮があったが、男子寮生が女子寮にストームをかけるというようなことも行われていた。

妻の語るところによると、山陽育ちの彼女にとって北陸の気候に適応することは困難だったようである。台所の冷たい水は指先にアカギレを生じさせてつらかったと言う。埼玉に来てからはずっと水洗トイレであるが、金沢では汲み取り便所であった。しかも冬季の積雪による作業の不便のために便槽が大きかった。

2000年夏にハノーファー万博を見物するために渡独したが、その時は再統一後のベルリンを見たのみで、ケルンには行っていない。その万博のブータン館でハンブルク大学の学生というブータン人と話をした記憶がある。2005年にブータンを旅行することになったのだが、実際にブータンを見たことが過去の記憶を再生さ

せたのかなという気がしている。

はじめのテーマに戻れば、人には記憶力があるが、それが完全でないので記録するという行為が生じる。記憶していると思っている内容が記憶開始時のそれと同じかどうかは実は分からない。記憶が薄れることは普通のことだし、記憶内容が時の流れの中で修正・改変される可能性を排除できないからである。

私は、この人生で自分が恩を受けたと思っている人たち、いわば人生の恩人とも言うべき人たちのことを、自分の記憶が失われ、記録が散逸する前に、書き留めておきたいと思っている。それが本稿を執筆したもう一つの理由である。